

平成29年度 第1回 石巻南浜津波復興祈念公園有識者委員会の概要

【平成30年度 第1回 石巻南浜津波復興祈念公園有識者委員会 資料】

平成30年5月10日

○中核的施設について

ご意見	対応状況
<p>運営が進むにつれて施設内に物がたくさん重なってしまうという事は避けるため、仮に展示量がふえたときにどこにそれを逃がすか、どの程度の壁面量が必要か、また、壁面以外の見せ方をどのように行うのか、空間構成の境目の設定を含めて整理する必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 復興祈念公園、旧門脇小学校、日和山等を含めた地域全体がオープンエアミュージアムとの認識のもと、公園の機能と中核的施設の役割から、品格のある静ひつな空間と展示空間の共存方法について、建築物の設計・施工を担う国と、展示計画・施工を担う宮城県が連携し、検討を進め対応していく。
<p>多目的スペースに休憩はよいのだが、喫茶とライブラリーと展示スペースと、およそ同時に成り立つか機能的に心配である。多目的という名前ですと混沌としてしまうため、バックヤードや機械室等を含めて何をここに持ってくるのかという諸室の機能を詰める必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 品格のある静ひつな空間と展示空間を共存させることが最も重要な環境と考えており、この環境の質を低下させないサービス提供のあり方について、国・県・市が連携して、維持管理運営面での対応を検討していく。
<p>この建物に同時に何人入ってもよいのかというキャパシティの問題もあり、特に荒天時に人を収容する施設がここしかないと思うので、多目的スペースと言いながら、どこまで物を詰め込めるかということも考える必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 国の基本設計では、建物のキャパシティとして288人を在館者数として設定している。今後、宮城県が進める展示計画では、建築基本設計で設定された在館者数に基づき、展示物の配置や内容について検討を行う。荒天時に建物利用が集中する際の誘導やサービスのあり方については、国・県・市による協議・調整を重ね、維持管理運営方針設定と合わせて検討を進める。

※本委員会資料-4・資料-5参照

○空間デザインについて

ご意見	対応状況
<p>中核的施設のキャパシティと関係するが、多くの人を利用する施設として、エントランスの幅が適正か、外構でハイネズで埋め尽くすという話もあるが、うまく人の処理ができるか精査をお願いしたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 国が行った中核的施設の基本設計では、避難安全検証法により避難の性能を検証し、5分程で理論上の最大収容人数628名が屋外に避難できるようエントランス及び非常口の幅を設定した。 • 東西2箇所出入口の他に、北側2箇所、南側1箇所の非常口を設けており、建築外周部には幅3mの円環テラスを備えており、どの方向にも避難できるよう考慮した。
<p>数字を予測できないような駆け込み、駆け出しという動線も考えられる。外構で植え潰しにすることで、本当に安全性が担保できるのか検討をいただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ご指摘を踏まえ、非常口3箇所のうち、ハイネズ植栽を検討していた2箇所について、避難動線上の植栽は行わず、スロープで速やかに避難できるよう修正した。
<p>公園周辺の状況が変化しても、この公園と日和山、そして旧門脇小学校の3つが一体化するという空間構成を大切にしてきたので、どこから旧門脇小学校を見せて、公園がどのように見られるかという点について、特に植栽の配置において、中核的施設の端からしか見えなくてもいいのかといったディテールが気になる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 中核的施設のメインエントランスとなる西側園路から旧門小が象徴的に見え続けるよう植栽の配置を見直した。 • 日和山は避難の象徴であり、発災時には避難目標となることから、北側展示室と南側展示スペースから見えるよう高木の配置を検討した。

※本委員会資料-4参照

○震災伝承及び震災遺構に関する検討状況について

ご意見	対応状況
<p>日本の文化に真・行・草というものがあり、展示もそういう整理の仕方をしながら、物が重複しないのではなく、まなざしが重複しないということを認識しつつ、どのような視距で、そのまなざしを祈念公園に持つてくるのかということが重要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 宮城県がH29年度に行った、震災伝承のあり方検討有識者会議においては、震災遺構・伝承施設のネットワーク化し連携・役割分担をしていくことが望ましいとされたこと、その中において、中核施設は沿岸地域におけるゲートウェイとしての役割が求められることから、今後、県内の各伝承施設の特徴を踏まえつつ、津波復興祈念公園にあるべきまなざしを考えていく。
<p>伝承のあり方検討について、宮城モデルを構築するとのことであるが岩手や福島とどう違うかということや有識者会議の中できちんと議論を深めていただくのと、有識者会議の他に広く一般に意見を募集するなど、形式的な議論に終わらないことをお願いしたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> あり方検討有識者会議においては、県全体の伝承をネットワーク化し牽引する官民連携組織の必要性が盛り込まれている。これを具体化するにあたっては、実際に伝承活動に取り組んでいる民間の多様な主体との連携は必須であることから、適切な機会を捉え、意見を反映させていく。
<p>公園の周辺は非常に変貌しており、そういう面でも日和山も含めて門脇小学校のありようの議論が一体化するよう詰めていただきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> かつて街であった復興祈念公園と、一時的に避難した旧門脇小学校、津波の襲来により更に避難した日和山の関係性は、オープンエアミュージアムとして後世に残すべき空間構成であり、お互いに見る見られ続ける環境の創出と維持が重要であるとの認識から、特に高木植栽の配置と、来訪者へ提供するサービスの質(サインや展示内容)について、国・県・市で連携しながら検討を進めていく。

※本委員会資料-5・資料-6参照